

# 博物館だより

No.42

平成21年10月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行  
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13  
TEL 0930-33-4666  
FAX 0930-33-4667

特別展

## 岩垂邦彦

明治日本の工学維新を担った男の軌跡

11月7日(土)～12月20日(日)

開催期間

平成21年11月7日(土)

～12月20日(日)

開館時間は9時30分～17時

00分(入館は16時30分まで)

開催場所

当館展示室

展示品

岩垂家資料・喜田村家資料

大橋洋学校ファンカステール賞状、工部大学校卒業証書、工部省辞令、日本電気株式会社資料ほか

小笠原文庫

藩校育徳館関係資料ほか

入館料

常設展示の観覧料をご覧ください

ただけます。

大人 200円

小・中・高生 100円

※団体料金は20名から。

臨時休館のお知らせ

特別展準備のため、11月6日(金)は臨時休館致します。

大橋洋学校ファンカステール賞状

工部大学校卒業証書

工部省辞令

日本電気株式会社資料

小笠原文庫

藩校育徳館関係資料

入館料

常設展示の観覧料

をご覧ください

ただけます。

大人 200円

小・中・高生 100円

※団体料金は20名から。

臨時休館のお知らせ

特別展準備のため、11月6日(金)は臨時休館致します。

いわだれくにひこ 岩垂邦彦 (1857～1941)

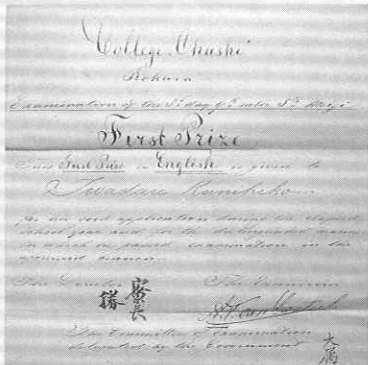


日本電気株式会社(NEC)創業者。現みやこ町豊津出身。

安政4年(1857)8月に喜田村脩蔵・マキ夫妻の次男として生まれたが、8歳の時に父の実家・岩垂家の養子となった。明治2年(1869)11月、豊津藩の藩校・育徳館(現育徳館高校)に入り、分校の大橋洋学校でオランダ人教師ファン・カステールの教えを受けた。明治8年(1875)10月、工学寮(後に工部大学校。現東京大学工学部)

の附属小学校(予備教育校)に入学。翌年4月に工学寮への官費入校が許された。明治15年(1882)5月に工部大学校電信科を卒業すると工部省に入り、約4年間、技術系官僚として勤務。

退職後は渡米し、トーマス・エジソンのもとで電気・電信技術を習得した。明治21年(1888)、大阪電灯株式会社(現関西電力)設立にあたり、技師として招かれ帰国。交流発電を導入し、またジェネラル・エレクトリック(GE)社製品の販売権を得るなど、会社経営に貢献した。その後、大阪で電気機械販売店「岩垂電気商会」を起こし、明治31年(1898)には、のちに世界的な企業へと成長する「日本電気合資会社」(翌年に株式会社化)を設立した。



▲ファンカステール賞状(大橋洋学校)

### 《古文書解読コーナー》

① 年表

② 〈ヒント〉ステージ

③ 木

④ 〈ヒント〉またもや

⑤ 内巻

⑥ 〈ヒント〉ムラにもどる

⑦ 炭

⑧ 〈ヒント〉内々に見る

⑨ 炭

⑩ 〈ヒント〉仲介

◎ 答え

(反対向きに見てください)

- ① 舞台
- ② 取次
- ③ 屏風
- ④ 内巻
- ⑤ 取次
- ⑥ 炭
- ⑦ 炭
- ⑧ 内巻
- ⑨ 炭
- ⑩ 舞台

みやこの歴史発見伝 31

# 岩垂邦彦と故郷

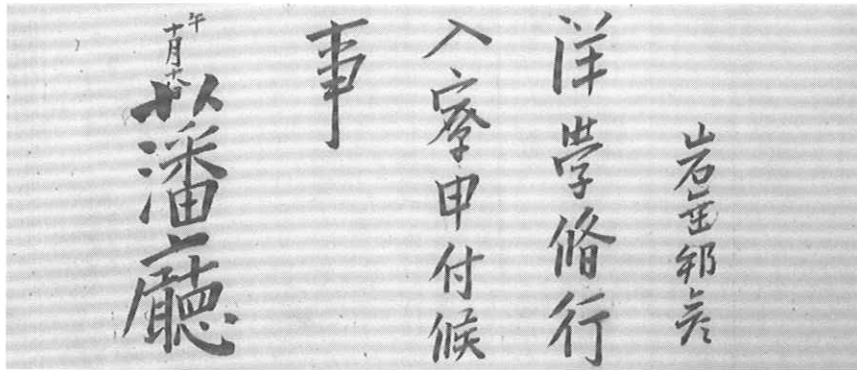
## 岩垂邦彦と故郷

現みやこ町豊津出身で、日本電気株式会社（NEC）を創業した岩垂邦彦は、回顧録などを残していないため、その故郷に対する「思い」や「思い出」がどのようなものであったか、彼自身の言葉から知ることが出来ません。

ただ、彼が現にとった行動や、残された資料を通して、彼の中で故郷がいかなる存在で、どのような「思い」「思い出」があったのか、推し量ってみることは出来るそうです。

故郷の「思い出」  
おそらく、岩垂邦彦にとって、少年時代、故郷で「洋学修行」を行ったことは、強烈な思い出であり、またその後の人生に大きな影響を与えたことは間違いないでしょう。彼が学んだのは、豊津藩の藩校・育徳館の分校で、仲津郡大橋村（現行橋市大橋）に設けられた「大橋洋学校」（江戸時代の公的宿泊施設「御茶屋」の建物を使用）でした。大橋洋学校は、明治三年

（二八七〇）一〇月に日本人教師のみによる英語学校として開校し、その後、明治四年一〇月から、同じ建物を使って、豊津藩が雇用したオランダ人、ファン・カステールによる洋学校が



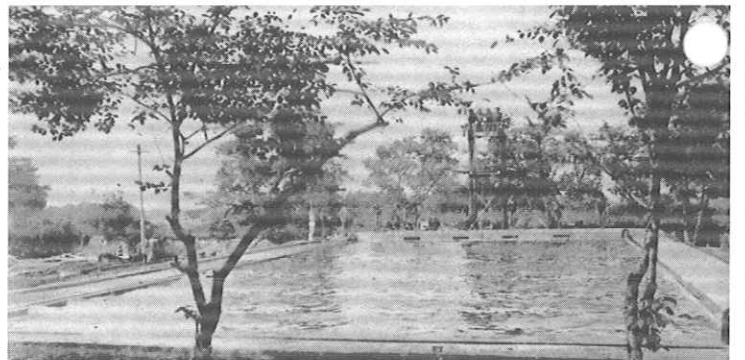
▲明治3年10月 豊津藩が岩垂邦彦に洋学修行を申し付けた文書（岩垂好彦氏所蔵）

開かれたのです（英語・独語・洋算などを教授）。岩垂邦彦は、日本人教師のみの頃から大橋洋学校で学びましたが、何よりもカステールに学んだ影響は大きく、また後々まで忘れ得ない思い出だったに違いありません。

ただ、そのカステール。八ヶ国語が使えると「自称」していたようですが、母国語以外の語学力がどの程度のものであったか不明です（後にカステールが行った西洋教育書の翻訳は、誤訳・悪訳の多いことが指摘されている）。また、豊津藩に雇われる以前、新潟で商売をめぐって大変なトラブルをおこすなど、やや怪しげな部分のあるオランダ人だったようです

（橋本美保『明治初期におけるアメリカ教育情報受容の研究』参照）。  
とは言え、それまでの日本人教師が教えていた「英語」（らしきもの）に比べれば、カステールの講義は、ずっとレベルが高かったことでしょう。また何よりも、西洋人と触れ合い、慣れ親しむことが出来たのは、その後の岩垂にとって大きなプラスになったと思われれます。

故郷への「思い」  
岩垂邦彦の母校・旧制豊津中学校（現育徳館高等学校）では昭和四年（一九二九）二月にプールが完成します。それまで、学校前



▲昭和4年完成の旧制豊津中学校プール

八八二に設立、翌年に活動を開始した財団法人で、豊前二市四郡（小倉市・門司市・企救郡・田川郡・京都郡・築上郡）出身の成績優秀者に、大学等での学資を貸与するため設立されたものです。その活動資金は、旧藩主小笠原家と、豊前地方在住・出身有志の寄附金によっていました。この豊前育英会の奨学金を受けて進学した者は多く、活動開始の明治一六年度から会務報告が残る昭和一二年度までの五四年間で、計七六八人がその恩恵を受けています。

豊前育英会では、昭和五年度から毎年行われた岩垂邦彦の寄附を「岩垂奨学資金」として別会計とし、特に商工業を志す学生に対し、ここから学資が貸与されました。最終的な彼の寄附総額は現在調査中ですが、昭和一二年度までには五〇万円（現在の貨幣価値で約三億円）に達してました。また、同年度までに岩垂奨学資金を受けた学生の総数は一一二名に及びました。

岩垂邦彦は、故郷への「思い」を語る文章を残していませんが、企業家として成功した後も、決して故郷を忘れなかったことは彼のこの行動から十分に窺うことができます。

（川本英紀）